



Title	Perífrasis en gerundioにみられる助動詞の特徴について
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1988, 13, p. 25-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Perífrasis en gerundio にみられる 助動詞の特徴について

中 岡 省 治

1. 問題の提起

1.1. *Perífrasis* (迂言形式)とは、単一の語形で示しうる文法形態を、特定の言語の形式的制限に従い二つまたはそれ以上の要素を用いて示すこと、をいう。従って、イスパニア語で *Perífrasis en gerundio* (ヘルンデイオの迂言法)という場合、形式上は形態素的機能を荷う動詞定形と語彙的要素としてのヘルンデイオから成り、統語上は単一の動詞定形に等しいふるまいをする動詞句、と位置付けられる。

1.2. いうまでもなく、この「ヘルンデイオの迂言形式」の代表的なものが、《*estar+gerundio*》である。ここでは *estar* が助動詞として扱われ、“*Estoy comiendo*”は“*Como*”の進行相を示す形式として定着し、*estar*は助動詞 (*verbo auxiliar*)として完全に文法化している。しかし、イスパニア語では古くからこの *estar* と共に、他の“運動”の意味をもつ動詞や“状態”の意味の動詞なども用いられてきているのに、今なお現代語文法においては上述の形式《*estar+gerundio*》の *estar* に代替しうる動詞の範囲については、明確な規準がないような印象を受ける。

以下に代表的な場合をみてみよう。進行相を示す形式《*estar+gerundio*》の構成要素で助動詞 *estar* に代替可能なものとして、諸説はどのような動詞を指定しているだろうか。

a) Esbozo (1973): *ir, venir, andar*^①

b) Lenz (1944): verbos auxiliares de reposo (*estar, permanecer, quedar, hallarse, encontrarse, etc.*); de movimiento (*ir, venir, andar, seguir, pasar, etc.*); verbos auxiliares que se refieren directamente al progreso de la

acción (*comenzar, principiar, continuar, concluir, terminar y otros*)^②

c) Dietrich (1983) : *ir, andar, venir, llevar; seguir, continuar, permanecer; quedarse, salir*^③

d) Gili Gaya (1985) : *ir, venir, seguir, andar*^④

ここにみた動詞の目録にばらつきがあるのは何に起因するのだろうか。《estar+gerundio》によって代表される迂言法の第一要素、いわゆる“助動詞”を規定する一定の枠、原則的基準が設定しえないものか。こうした点を、進行相を示すヘルンディオの迂言形式を中心に考察するのが本稿の目的である。

2. 進行相を示す迂言形式《V(fto)+V(ndo)》^⑤の枠設定のためのいくつかの基準。

2.1. 形態的基準。

- (1) *Estaba* gritando el nombre de su perro.
- (2) *Iba/Venía/Andaba/Seguía/...* gritando el nombre de su perro.
- (3) *Lloraba* gritando el nombre de su perro.
- (4) *Babía/Caminaba/Fumaba/Volvía/...* gritando el nombre de su perro.

今ここで(1)を進行相を示す迂言形式の基本的なものとした場合、これと同じ構造、つまり《V(fto)+V(ndo)》という組み合わせは、(1)や(2)に限らず、(3)や(4)のような場合にも現われ、この形式上の文法性のみをいうとすれば、(3)と(4)も(1)、(2)と同様適格文である。つまり、表面的には(1)の *estaba* 以下(4)の *volvía* まで、動詞定形の相互交換が可能、ということになる。

ということは、《V(fto)+V(ndo)》という形式に拠ってのみこれらの構造をみると、(1)~(4)は同じ一つの構造に属する形式、といえるかもしれない。しかし、事實は、(1)と(3)とは同一の構造ではない。というのも、この2文の間には、文法構造上、いくつかの違いが感知されるからである。また、上の《V(fto)+V(ndo)》という形式をすべて《動詞定形+ヘルンディオ》という形式に読み変えた場合、これはイスパニア語では非常に生産性の高い構造であり、その実現の可能性は無限で、現に存在する進行相を示す形式としての文法範疇の存在をも否定する、という結果にもなってしまう。この意味で、形態的基準は異なる2種の文法構造の区分付けには無力、といわ

ざるをえない。

2.2. 意味的基準

伝統的にみて、助動詞とは、特定の語彙動詞がある特定の文法構造に現われる場合、それ固有の語彙的意味を弱め、最終段階ではこれが完全に消失し、形態素動詞 (*verbo morfemático*) つまり機能語として文法化した場合、と規定されてきた。この考えの代表的なものが Gili Gaya (1985) のいう、“動詞固有の語彙的意味の弱化あるいは消失説” となるだろう。以下に簡単にこの立場からの説を紹介してみよう。

2.2.1. 各動詞に固有の意味と助動詞

Para distinguir si un verbo está empleado como auxiliar basta fijarse en si ha perdido su significado propio. Cuando decimos *voy a contestar a su carta*, el verbo *ir* es auxiliar, puesto que no conserva su acepción de movimiento de un lugar a otro, como no la conservan tampoco los verbos *andar* y *venir* en expresiones como *andaba mirando las láminas de un libro*, *venía sospechando de este hombre*. (...) Como todos estos verbos (con excepción de *haber*) conservan en la lengua moderna su acepción propia, el sentido habrá de decidir, en cada oración en que aparezcan tales perífrasis, si su significación se ha perdido o se ha oscurecido en grado suficiente para estimarlos como verbos auxiliares.

ある動詞が助動詞として用いられているかどうかを見極めるためには、その動詞がそれ本来の意味を失なったかどうかをみるだけで十分である。*Voy a contestar a su carta* 「私は彼の手紙に返事をしよう」というときには、動詞 *ir* は助動詞である。なぜかといえば、この動詞は、一点から他の一点への移動という語義を保持していないからで、これは *andaba mirando las láminas de un libro* 「私はある本の図をなんととはなしに見ていた」；*venía sospechando de este hombre* 「私はこの男を怪しいと思ってきていた」の場合も同じことになる。(…)

これらの動詞はすべて (*haber* を除いて) 近代語ではそれ本来の語義を保っているので、そうした迂言形式が現われてくる各文で、その文の意味から、動詞の意味作用が消失したか、それともそれらの動詞を助動詞として認識するのに十分な程度に、その意味作用が弱化したかどうかを決定すべきものとなるだろう⑥。

しかしこの論理が絶対的なものでないことは誰の目にも明らかである。というのは、例文 “*andaba mirando las láminas de un libro*” に “*para mejor aprovechar el tiempo* 「時間を無駄にしないでおくために」” を付加すると、この *andar* はたちまち *andar* に本来固有の語彙的意味「歩く」

としてしか解釈しえなくなってしまうからである。こうしてみると、第2例の“venía...”にも、例えば“en todo el camino「道中ずっと」”といった副詞句を付加した場合、venía には「来た」という本来の語彙的意味が与えられるだろう。この点からしても上記2文の andaba, venía の助動詞化といっても、これは多くの実現の可能性の一部を取り上げたにすぎないことが分かる。

Gili Gaya (1985) はまた次のようにもいっている。

Estar es un verbo de estado y cuando va unido a otro verbo de la misma clase, puede decirse que no es auxiliar, sino que tiene su significado propio, p.ej.: *Está viviendo con sus padres*; *El niño está durmiendo tranquilo o tranquilamente*, según veamos en *tranquilo* el atributo de una oración atributiva o una modificación del verbo.

Estar は状態動詞で、他の同類の動詞と組むときには、助動詞ではなく、それ本来の意味をもつといえる。例. *Está viviendo con sus padres* 「彼は両親と一緒に住んでいる」; 但し, *El niño está durmiendo tranquilo o tranquilamente* 「その子はすやすやと眠っている」では, *tranquilo* 「すやすやと」を帰属文の属詞とするか動詞の修飾語とするかによって、扱い方は違うけれども⑦。

ここで Gili Gaya は、*El niño está durmiendo tranquilo* を帰属文とし、*estar* を“es casi un verbo copulativo — ほぼ繫合動詞である”と定義しているが、こうした解釈が妥当性をもつかどうか疑問である。つまり、繫合動詞に果してどのような語彙的意味を与えたらいいのだろうか。

この Gili Gaya の考えに対し、J. M. Lope Blanch (1962) は次のように述べている。

Si los dos verbos relacionados forman una sola unidad predicativa, cualquiera que sea el contenido semántico individual de cada uno, podremos afirmar que se trata de una perífrasis; si cada uno de ellos funciona como verbo, es decir, representa un predicado distinto atribuido al mismo sujeto, la perífrasis se habrá roto para dar paso a dos oraciones distintas. Por ello, no me parece acertado sostener, como hace Gili Gaya (§97), que las construcciones formadas por el verbo *estar* + el gerundio de algún verbo de estado no constituyen perífrasis, porque *estar* conserva su significado propio: *Está viviendo con sus padres* (p. 114). Si admitiéramos que esto no es una perífrasis, tendríamos que descubrir en esa frase dos predicados, dos oraciones, ya que son dos los verbos que en ella aparecen. El análisis gramatical

resultaría absurdo: *Fulano está* = oración principal (¿ocupa un lugar?); *viviendo con sus padres* = oración subordinada (¿modal?). —No; en esa expresión sólo existe un predicado; del sujeto sólo decimos que *vive* (temporalmente) *con sus padres*.

2 個の関連した動詞が一つの述部をなす場合、その個々の意味内容が如何なるものであれ、これは迂言形式と断定出来る。逆に、2 個の動詞の夫々が動詞として機能する、つまり、同一の主語に帰属する異なった述部を表わすのであれば、迂言形式は分解して、異なる二つの文に移行したことになる。従って Gili Gaya (§97) がいうように、「*estar*+状態動詞のヘルンディオの造り出す構造は迂言形式を成さないが、これは *estar* が本来の意味を維持しているからである。例. *Está viviendo con sus padres* (p.114) (彼は両親と一緒に暮している)」、と主張するのは、私には当を得たものとは思えない。もし仮にこれが迂言形式でないということを認めるとすれば、この文には二つの述部、二つの文を見付け出す必要が生じてくることになる。というのは、この文に現われている動詞は 2 個だからである。しかし、次のような文法的分析を行なったとすれば、それは整合性を欠くことになる。Fulano *está* = 主文 (誰かがどこかの場所にいるのか?); *viviendo con sus padres* = 従属文 (様態のか?)。いやそうではない。その表現には一つの述部しかない。その文は、「主語がその両親と暮している(一時的に)」、とっているだけのことである^⑧。

資料体の調査で次のような用例を得た。脈略的に、前者は実際の「行く」という動作があり、後者にはこれがないといえる。しかし、このように比較的是っきりとした区別が可能な場合は少なく、本来の語彙的意味の弱化・消失を基準にして助動詞化を云々することは、実際上は非常にむづかしい^⑨。

- (5) Era una noche bastante clara y yo *iba caminando* sin demasiada prisa, de vuelta a mi casa. Diré que *iba oyendo* la radio, y aún más concretamente “En un jardín persa”. (*Antología*, II, 63)
- (6) Diciéndolo Matilde simulaba con la boca aquel zumbido de los hilos telefónicos. Luego el zumbido *iba subiendo* hasta convertirse en un mugido triste. (*Id.*, 51)

2.2.2. Amado Alonso (1970) は、“ある語が規則的な意味変化を蒙り、それ本来の実質的な意味をもたなくなるほどにその意味作用を弱化させると、直ちに、その語は文法化に入る”^⑩ と述べた後で、この意味変化の過程に、転義的意味 (*sentido trasladado*) と変形的意味 (*sentido transformado*) とを置いて、後者が文法化の始まりになる、としている。Amado

Alonso はこの点を具体的に次のようにいっている。

Aunque los límites entre el uso metafórico y el cambio semántico de los verbos de movimiento son a veces inseguros, hay que esforzarse por trazarlos. Sea el verbo *salir*: en *salió del trance humillado*; *salir de apuros*, hay un uso metafórico, no un cambio semántico. (...) En *salir verdadero*, *salir poeta*, *salir herido en la batalla* . . . , ya no hay una significación metafóricamente empleada, sino una significación nueva: “resultar”. En el primer caso, sentido trasladado; en el segundo, sentido transformado.

比喩的用法と意味変化との境界は、ときには不確定ではあるが、それを画するよう努めるべきである。*salir*「出る」を例にすると、*salir del trance humillado*「彼はその窮地をほうほうの態で脱した」；*salir de apuros*「難局を切り抜ける」では、比喩的用法があり、意味の変化はない。(…) *salir verdadero*「本当になる」、*salir poeta*「詩人になる」、*salir herido en la batalla*「戦争で傷を負う」…では、もはや比喩的に用いられた意味作用ではなく、新たな意味形成、つまり *resultar*「結果…になる」がみられる。最初の場合は転移的意味、第2番目の場合は変化的意味である^⑩。

Amado Alonso は続けて、この新しい意味作用は特殊な統語構造から生じたものであるとして、意味の変化と統語構造との密接な関係をも指摘している。但し、ここで分析の対象となっている構造の種類が多きに亘っているので、広く一般的に適用しうる原則を見出しえないような印象をも受ける。例えば、*anda murmurando* と *vive murmurando* とを共に同じ枠内で扱っているが、この二つの構造の意味的、統語的可能性は違いうだろう^⑪。

2.3. 統語論的基準

《V(fto)+V(ndo)》という連鎖は、常に二つの構造を含んでいる。一つは《助動詞 + gerundio》という迂言形式で、これは意味的にも統語的にもヘルンディオの人称形に置き換えられる。もう一つは、《主動詞 + 状況補語》となる形式に対応し、この場合ヘルンディオは状況補語として、本来的には複文の従属節を表わす場合である。この二つの場合を区分するための基準の設定が求められてきたが、2.2. でみたように、意味的基準はあまり効果を挙げていない。この面で大きな発展をみせたのが、M. B. Fontanella de Weinberg (1970) を始めとする、統語論的観点からの分析である。以下に簡単にその基準をみてみよう^⑫。

2.3.1. 2種類の構造

- (7)
- Está gritando el nombre de su perro.*

上文には次のような操作, 変形が可能である。

- (8)
- ¿Qué está haciendo?*
- ^⑭

- (9)
- El nombre de su perro está siendo gritado por él.*

- (10)
- Lo está gritando.*

- (11)
- ¿Qué está gritando?*

- (12)
- Lo que está gritando es el nombre de su perro.*

しかし, 次の文では上記のような操作は不可能になる。

- (13)
- Llora gritando el nombre de su perro.*

- (14) *
- ¿Qué llora haciendo?*

- (15) *
- El nombre de su perro llora siendo gritado por él.*

- (16) *
- Lo llora gritando.*
- ^⑮

- (17) *
- ¿Qué llora gritando?*

- (18) *
- Lo que llora gritando es el nombre de su perro.*

この二つのグループ間のふるまいの違いから, 両者が同一の構造を持たないことが証明される。この差は正しく, (7)の *está gritando* が《助動詞 + gerundio》という迂言活用をなすのに反し, (13)は《主動詞 + 状況補語》の現われの一つで, 構造的には次のようなものに等しい。

- (19)
- Sé que estuve allí viendo esa película, por cierto bastante facha-sa ... (Antología, II, 73)*

2.3.2. 次いでは以下の6文について同じ操作を行なっても, そこで得られる結果は(7)~(12)の場合とほぼ同じになる^⑯。

- (20)
- El mismo va construyendo la casa.*

- (21)
- Viene acumulando riquezas y honores.*

- (22)
- Anda dudando la noticia.*

- (23)
- El alumno sigue estudiando el latín.*

- (24)
- Ella queda mirando el auto de su esposo.*

- (25)
- El comité lleva discutiendo el problema desde hace un año.*

但し, これら(20)~(25)の場合も(13)と同一の構造の表面的現われと見做しうる可能性もあって, この点では依然として“助動詞化の基準の設定”という問題は解決していない。

2.3.3. 《V(fto)+V(ndo)》といった表面構造につきまとう“迂言形式”かそれとも“複文”か、という問題解決の手段として、Eugenio Coseriu (1960) は次のような基準設定を行なっている。

Así, es cierto que una expresión como *salir diciendo* puede ser perífrasis o no serlo: pero lo es en construcción «inmediata» (por ejemplo: *Siempre estuviste de acuerdo conmigo y ahora te sientas a la mesa y sales diciendo que no sabías nada del asunto*) y no lo es en construcción «mediata» (por ejemplo: *Salió de la casa diciendo que volvería a las tres*).

従って、確かに *salir diciendo* のような表現は、迂言形式になる場合もそうでない場合もありうる。つまり、《直接的》構造では迂言形式で（例. *Siempre estuviste de acuerdo conmigo y ahora te sientas a la mesa y sales diciendo que no sabías nada del asunto* 「いつも君は私に同調したくせに、今はテーブルに着くなり、そんな事柄は何も知らなかったといい出すのか」）、《間接的》構造では迂言形式ではない（例. *Salió de la casa diciendo que volvería a las tres* 「彼は3時に帰るといって、家を出た」）^⑩。

Coseriu にとっては、上記の *salir* のような動詞が迂言形式をなすためには、それ自体の補語——殆んどの場合、状況補語になる——を表面的にもまた脈略的にも（*ni expreso ni contextual*）帯びてはならない、ということが必要条件になる。こうした形式的で且つまた統語的な観点からの規準によって、形式的に《助動詞+gerundio》なる迂言表現の資格付けがなされ、これに次いで、2.3.1.のいくつかの操作を介し最終的な枠付けがなされるのが、助動詞決定のための手順としては説得力を持つものと思われる。

2.3.4. これ以外に Bernard Pottier (1961)^⑪ や Leonardo Gómez Torrego (1986)^⑫ のように、《助動詞+gerundio》の単文性に着目し、この動詞連辞が意味的には二分化しえないが（*está diciendo*≠*está y dice*），もし助動詞でない場合には二分化しても意味には変化はない（*habla diciendo*≡*habla y dice*），とする扱い方も提案されている。特に、L. Gómez Torrego は、後者の場合を《Cuando X, Y》, 《Mientras X, Y》, 《X e Y》などの構造に変形が可能であるとしている（pág. 34）。しかし、こうした書き換えの可能性の有無は、当然のことながら、上記2.3.3.の基準の適用から得られる必然的結果の一つにしかすぎない、と考えることも出来るので

ある²⁰。

2.3.5. これまでみたように、助動詞の決定にかかわるいくつかの基準には、いずれも不十分な点がみられた。そこで少し視点を変え、以下に《V(fto)+V(ndo)》から成る形式が、《助動詞+gerundio》であることを証明すると思われる統語上の現象をみておこう。これは現代スペイン語で最も安定した統語法で、従って出現頻度数も多い構造で、以下の用例(26)から(32)までに当る。

- (26) Le cogí por fin una mano; *se la* estuve besando, y él, sin despertarse, me acaricié,... (*Antología*, I, 315)
- (27) Y todo era como un gran arco y nosotros *lo* íbamos pasando y al otro lado estaba nuestro mundo y nuestro tiempo ... (*Id.*, 147)
- (28) (...) hacía ya cuatro años que el pastor la tenía puesto el ojo y *la* (= la loba) venía reconociendo, lo mismo por la pinta que por el rostro. (*Id.*, 353)
- (29) (...) y el pastor *les* andaba insistiendo que bajaran al chozo y pararan allí a mediodía. (*Id.*, 351)
- (30) Don Renato *se le* quedó mirando, con gesto despreciativo; se detuvo en su paseo y ... (*Id.*, 357)
- (31) Cerré los ojos, pero como si no, *los* seguía viendo alejarse. Me tapé los ojos cerrados con las manos. Aun así *los* seguía viendo alejarse. (*Id.*, 303)
- (32) Siempre me ha pasado igual, agarrao a *las* faldas de la vieja y a comer caliente todos los días. *Lo* llevo pensando desde que nos dieron el pasaporte. (*Id.*, 450)

これらはいずれも(10), (16)にすでに言及したが、いわゆる“clitic climbing”としてヘルンディオの迂言形式のみでなく、広く助動詞決定のために用いられる重要な操作の一つである。例えば、《動詞定形(+関係辞)+不定詞》の場合にも、次のような差が認められる²¹。

- (33) Luis *las* trató de comer.
- (34) * Luis *las* parece haber comido.

また上の7例の弱形代名詞の位置は、次の場合とも対立している。

- (35) El *la* siguió preguntándose de qué se trataría. (*Antología*, I, 455)

加えてこれまでに触れた諸点を具体的に示す諸例をも、以下に挙げておこう。

- (36) Ramón *estaba en el comedor viendo* caer el agua cuando entró Luisa. (*Id.*, 325)
 (37) *Lleva usted más de un año tomándonos* el pelo. (*Id.*, 160)
 (38) *Avanzaba* el capitán *rezando* el rosario, con voz de tinaja. (*Id.*, 260)
 (39) *Caminaban* marcando el paso por el centro de la calle. (*Id.*, 257)
 (40) Los colegiales *corrieron dando* gritos hacia la puerta del pabellón. (*Id.*, 287)
 (41) El prefecto *marchaba pastoreando* las filas. (*Id.*, 292)

3. 中間的なまとめ

3.1. 表面的な形式《V(fto)+V(ndo)》は、前述のように「助動詞+gerundio」なる構造と他に「本動詞+gerundio」という構造とを表わすが、前者の構造では助動詞として機能する動詞は、数的には僅少である。しかし、ir, venir, andar など“運動”の意味を持つ動詞が助動詞としても機能するのに、avanzar, caminar など“運動”の動詞が助動詞として意識されず、勿論のことイスパニア語文法でもそうした資格付けがなされていないのも、これもまた事実である。これは単にイスパニア語の慣用、として処理しうる問題であろうか。この二つの場合は次のような図式にまとめることが出来よう。

形 式		助動詞	非助動詞	
V(fto)+V(ndo)	a	+	+	(estar, ir)
	b	—	+	(caminar)
V(fto)+V(inf)	a	+	+	(querer, ir)
	c	+	—	(soler)

上記の疑問に対しては、相的な意味や叙法的な意味を表わしうる語彙動詞は、特殊な意味のものに限られ、諸言語間にあっても、上表 a タイプに

属する助動詞はその語彙的意味を同じくすることが多い、という事実を挙げるに止めておこう。

3.2. ここではこれまでみた事柄を踏まえ、若干の観察を行なってみよう。

- a. (26)~(32)に現われた形式《V(fto)+V(ndo)》は、統語的にはヘルンディオの人称形と代替可能である。従って、これに先行して位置する代名詞弱形は、統語的にも意味的にもヘルンディオの補語になる。
- b. (35)~(41)については、a の考え方は適用しえない。
- c. (26)~(32)にある動詞定形は、本来の独立した語彙動詞としては、自動詞か [(26)~(30)], 他動詞か [(31), (32)] のいずれかに属している。しかし、(26)以下の6文ではこの意味的特徴を失っている。
- d. c に述べた意味上の変化は、個々の語彙動詞が本来的に持つ制辞 (rección) の能力の欠落として、意味・機能的には、個々の語彙動詞に固有の結合価 (valencia) の欠落と解釈される²²⁾。例えば、上例(35)の “la siguió” を “siguió” と変化させてみると、この動詞定形の統語的、意味的価値は前者とはまったく違ってしまう。

(36) El *siguió preguntándose* de qué se trataría.

加えて、文(35)、(36)と次文(37)とを比較することによって、動詞定形が帰属する自動詞あるいは他動詞という意味的特性が、《V(fto)+V(ndo)》という連鎖を統語的に規定するのに如何に働いているかが、明らかとなろう。

(37) ... y (el pastor) emitía vigorosos y largos silbidos ... y *repetía gritando los nombres de sus perros* ... (Antología I, 349).

- e. これまでの観察を総合の結果、《V(fto)+V(ndo)》という連鎖での動詞定形の“助動詞化”は、これら動詞が本来的に有する自動詞性、他動詞性²³⁾ という特性を放棄することに始まる、といえる。

4. 助動詞化の可能性

4.1. 次の文をみてみよう。

- (38) Todo en aquel momento — el alba, el pino, la lluvia, el cansancio, la abuela — *estaba destrozando* la primera infancia de Maxi.
(Antología, I, 366)

- (39) Hola, Inés. *Está haciendo* un frío del demonio. (*Id.*, 289)
- (40) Julianete repara en que, tal vez por sus arrimaduras a los huesos, *andan diciendo* de él los muchachos de la escuela que huele a difunto ... (*Id.*, 267)
- (41) Yo *llevo* tres días *intentando* ponerme con ello, y no encuentro momento bueno. (*Id.*, 307)

この4文について、斜線部の動詞定形の相互の代替の可能性を検討してみよう。(40), (41)の *estar* による代替は何ら問題はなく、これによって夫々の文の知的意味に変化が生じることもない。片や(38), (39)の *estar* を *andar* で置き換えようとする、母国語話者の直感では大きな抵抗が感じられるようで、特に(39)はまったくその可能性がないようである。同じ2文の *estar* を *llevar* により置き換えることも不可能と考えられる。この代入の可能性の違いは何に起因するのだろうか。これはやはり *estar*, *andar* と *llevar* という3動詞が夫々、上記の構造で示す選択制限の差にある、と考えたい。つまり、*andar* の主語となりうるものは、[+自動性] という意味素性を持つことが必要だが、(38)はそれを満足させるには主語は抽象性が強すぎるし、(39)にいたっては、特定の主語を持たない非人称表現であるからである。(41)の *llevar* も、既に“場所”、“方向”の意味は留めていないにしても、その「保有する」「持ち運ぶ」という意味から、当然のことながら、[+有生]の意味素性が主語に対して要求されるので、*andar* と同様、(38), (39)の *estar* を代替するものとしては不適當と見做される、と考えたい。これに反し、*estar* は主語の選択に関し何らの制限をも示さないことになる²⁴⁾。

4.2. こうした *estar*, *andar*, *llevar* の3動詞の呈する主語の選択制限に関する差は、個々の動詞が本来的に有する結合価の変化、即ち結合価の減少と解釈出来るであろう。この現象はすでに、体系的な側面から Guillaume (1973)によって《subductivité》として指摘されているので²⁵⁾、以下にこの点を検討してみたいと思う。

4.2.1. Dietrich (1983)はこの概念を次のように説明している²⁶⁾。

Según Guillaume, los verbos que pueden emplearse como «auxiliares» son aquellos verbos que se distinguen de todos los demás verbos por una propiedad particular que denomina «subductivité». La

《subductivité》 se basa en el significado léxico de estos verbos y supone la facultad de 《descender》 ideológicamente *por debajo de contenidos verbales menos generales*, en el curso de una jerarquía de abstracción puramente *lógica*: ils descendent dans la pensée au-dessous des autres verbes, auxquels ils apparaissent idéellement préexistants.

Guillaume によれば、《助動詞》として用いられうる動詞は、《subductivité》と呼ぶ一つの特殊な特性によって、残余のすべての動詞から区別される類の動詞である。《subductivité》は、これらの動詞の語彙的意味にその基礎を置いて、一般性の程度がより少ない動詞の意味内容の下方に、純粹に論理的抽象化の階層関係の中で、観念的に《下降する》能力を予想させる。即ちこれらの類の動詞は、思考の中で残余の動詞の下方に下降し、加えてこれらの残余の動詞には、概念的な先在項としての場をとる。

4.2.2. 以下にこの《subductivité ; subduction》について少し敷衍してみよう²⁷。

《Subduction》とは、語 (mot) の個体発生 (ontogénèse) の過程にみられる現象で、各語は二面的発生の産物、つまり実質発生 (genèse matérielle) と形式発生 (genèse formelle) との綜合体である。一般には、この両者の発生は等時的、同時進行的である。しかしこの二つの発生が同時進行しない場合もある。このように二つの発生の進行過程にずれが生じた場合、その発生過程を早く完了したものが、もう一方の未完成な発生の進行をも中断させてしまう。加えて、既に完成をみた方の発生が、語全体としての個体発生を終了させ、結果として、未完成な状態にある発生を未完成のままに留め置く、といった作用をもなす。つまり、未完成の発生の立場からいえば、この段階で、それ自体が完成点に向かって進行し、完全と見做される状態に至る可能性が断たれたことになる。このように、期待された完全な状態が成立せず、その一部が欠落したままで留まった状態が *subductive* (*subductivo*) と呼ばれている [*subductive par rapport a ce qu'elle (= la genèse moins prompte) eût été sous son accomplissement entier*]²⁸。

Guillaume はまた、この個体発生を支える実質発生と形式発生とが等時的である場合には、そこに形成される語は内的 *subduction* (*ésotérique*) の対象にはならないとする。しかしこの実質発生と形式発生とが同時進行的でない場合に、内的 *subduction* が生ずるとし、特に助動詞とは、動詞の発生で形式発生が実質発生よりも早く完成し、後者が未完成のままに残る場合と規定した。従って、助動詞は常に実質面で——意味的に——不完

全であるので、その意味を完全にするために、他の語の補填を必要とするとし、これを動詞複合形式 *avoir marché* を例とし、次表によって説明している²⁹。

	実質	形式
Avoir :	a) 形式面では完全な動詞 (これはすべての叙法 とすべての時制に活用 する)	F
	b) 実質面では不完全な動 詞 (subduction)	M - q
Marché	欠除している実質を導 入しまたこの資格での み介在する語	q
総合の結果	M	+ F

4.2.3. この *Guillaume* の説をイスパニア語に適用し発展させたのが、*Mauricio Molho* (1975) であるが³⁰、ここでは本稿のテーマと関連する事項として以下の諸点をまとめておこう。

a. 諸言語体系において、個々の動詞はその範列関係の中で *subductivité* の能力の大小によって、意味的、概念的に序列化される。

b. この序列化、際層化の過程で、「位置 (*posición*)」や「運動 (*moción*)」を意味する動詞 (*quedar, ir, venir, etc.*) が、その他のほぼ全部の動詞に対し先在項としての位置を占める。次いでは、これら「位置」と「運動」の動詞に対しては、「能力 (*potencia*)」を意味する動詞 (*poder, saber, querer, deber, caber, etc.*) が、その先在項となり、この序列化を経て最下層の「基本動詞 (*verbos fundamentales*)」(*haber, ser ; tener, estar*) という基底部に至る。

c. こうした個々の動詞に与えられた意味内容を基として、一体系内の動詞全体を概念的に、相互に序列化するための規準として、*subduction* がある。

d. *Guillaume* は、上記の範列的序列化にかかわる動き (*subduction exotérique ; subducción exterior*) と、個々の動詞の内部に発生する現象 (*subduction ésotérique ; subducción interna*) とがあることを指摘した。

e. この内部 *subduction* の動きが、ときには個々の動詞の意味を削減

し、その意味構造に間隙を生じさせ、独立の動詞としては意味的不安定を引き起す。ここに助動詞成立の可能性が認められる。

f. このような観点から助動詞の成立をみることは、意味的な立場から助動詞の存在を正当化しようとする説2.2.と共通点があるといえる。但し、この説が、まず特定の動詞の語彙的意味から出発し、この意味の弱化、消失をもって助動詞の発生をいうのに対し、Guillaume は文法的な機能のみの形態素動詞には、基本的に機能語としての意味しか認めていない、という点が大きな差になる^③。

5. 助動詞成立の可能性

5.1. Guillaume は、subductionという意味形成過程上にみられる現象に拠って助動詞成立の可能性を指摘した。ただ前述の表(4.2.2.)にも明らかなように、その説明にあっては助動詞が特徴的に現われる構造にも言及してはいるが、基本的には、これを体系上の絶対的なカテゴリーとして位置付けているように思える。あえていえば、「体系的に助動詞がある」→「これは意味的に常に空白部分をもつ」→「この意味の空白を埋め意味を完全にするための語が必要である」→「助動詞 haber は marchado を補充して haber marchado が成立した」、という論理がみられるように思う^④。

5.2. 他方、助動詞の決定に当って重要なのは、それが特殊な形式、今ここでは《V (fto)+V (ndo)》、の枠内にのみ現われるという事実であると思う。この形式は機能的には通常、継続相を表わす構造として特定化され、発話の場では表面に現われたこの構造が、意味弁別上重要な手掛りにもなっている (Está comiendo/Come)^⑤。勿論のことこの形式が継続相をいうためには、これが意味的にも統語的にも一単位としてまとまりをなす必要がある。加えて、こうした一機能単位が成立するためには、接近の方法は夫々に異なるが、動詞定形の“意味の弱化・消失”とか“意味の空白化”を必要条件とするという点で、諸説が一致しているのも明らかな事実であろう。

5.3. 各語彙動詞の“意味の弱化・消失”とか“意味の空白化”という場合には、その対立項として“本来の意味”とか“基本的意味”が存在すべきである。しかし各語彙が現実の発語で表出する意味は、体系的に個々

の言語形式に割り当てられた多くの可能性の一つの実現であると考えれば、絶対的な存在としての本来の意味 (significado propio) も否定されてしまう。

しかしながらそうはいっても、体系の中で各語彙動詞の存在を保証するような“意味”，つまり動詞の本来的な意味がある、と考えたい。こうした立場から、今ここで ir「行く」、venir「来る」、andar「歩く」の意味内容の分析を試み、次表のようにその構成単位を設定してみた。

動 詞 意味構成単位	ir	venir	andar
1. 空間の移動	+	+	+
2. 歩 行			+
3. 目 標 点	+	+	
4. { 話者起点 聴者起点	+	+	
5. { 直 線 性 反 覆 性	+	+	+

(註: 空欄は各動詞が積極的にその意味の特徴を示さないことを表わす)

もし仮に上表の4個の意味構成単位がすべて組み込まれて動詞が実現された場合を、ir, venir の本来の意味が形成されるとき、と考えたとすれば、その本来的な意味とは、この3動詞が可能な限りの行為項を持つことの出来る意味の段階、と解釈出来るだろう。例えば、ir を始めとし本稿で考察の対象としている venir, andar, 加えて estar, quedar など自動詞の場合、第1行為項と状況項——一つとは限らない——とを伴う場合である。seguir と llevar の場合には、第1行為項、第2行為項、状況項を伴いうる段階をこれら2動詞の本来的な意味とすればいいだろう。

すると“意味の弱化”とか“意味の空白化”とは、上表のいずれかの意味構成単位が失なわれることを意味する。但し、ここで見逃してならないのは、上表中1の[+空間の移動]は、3動詞に共通の単位であり、“行為能力を持つ動作主”を第1行為項に要求する、ということである。加えて、もし上表に設定した意味構成単位が適切であるとすれば、3動詞間に意味の弁別を可能とするのは、2以下の各単位で、これらが“移動”の状況を精密化する要素、つまり状況項にかかわる部分といえよう。ここから、個々

の語彙動詞の結合価を決定するのは、複数動詞間に共通する抽象的な意味構成単位と、個々にその抽象単位を特定化、具体化する働きの構成単位(の一部)となる³⁴。

5.4. ここでみるような語彙動詞がその“本来的な意味”を持たず、前記(7)~(12)のような構造の一部となったり, clitic climbing のみられる構造を支える動詞句の一部となったりする。また次のような構造にも現われてくる。

- (42) El vocabulario románico *sigue estando poco investigado* desde el punto de vista sincrónico (Horst Geckeler, *Semántica estructural*, pág. 349).
- (43) El campo petrolífero entró en producción en 1890, es decir, que desde hace 70 años *se vienen efectuando* las excavaciones.³⁵
- (44) Creo que *va siendo* hora de que pasemos al jardín. (Sánchez Ferlosio, *El Jarama*, pág. 35)³⁶

この(42)~(44)の場合には、まずこれら 3 動詞の主語の名詞に期待されてしめるべき〔+行為能力〕という意味素性がみられない。この要件の消失は、正しく個々の語彙動詞に帰属していた結合価の消失に起因すると思われる。また、こうした結合価の変化は、状況項の弱化あるいは消失をもたらすような意味構成単位の変化、削除から始まると考えたい。その理由は、こう考えることで、例えば次の文 *iba* の意味的、統語的機能が説明しうるところからである。

- (45) — Te conozco, Teresa. He sido muchos años vecino tuyo.

— ¿Dónde vivía usted?

No tuvo respuesta. Teresa *iba repasando mentalmente* su vecindario a través del tiempo. ¿Sería el hijo de la Agueda, la mujer del guardia? (*Antología*, I, 180).

これと同時に重要なのは、これらの動詞は特定の文法構造においてのみ、上記の変化を蒙る可能性を帯びることがある、ということである。これは、主語について少なくとも二種の叙述がなされ、そのうち一方が他方を意味的に制限するような関係にある場合で、これが《V(fto)+X+V(ndo)》(Xは任意の要素)という統語形式³⁷として現われる場合に限る、ということが出来るだろう。

5.5. 以下にこの項で述べたことをまとめてみたい。

まず, 5.3. で試みたような意味構成単位の分析を *estar* と *quedar* についても行なってみると, 次のような結果に至る。

動 詞 意味構成単位		estar	quedar
1. 状	態	+	+
2. 存	在	+	+
3. 場	所	+	+
4. 静	止		+
5. 対	比		+

(註. 空欄の扱いは5.3. のものと同じ)

このような意味の単位を持つと考えられる *estar* は, 本稿のテーマに係する次のような構造に現われる。

- (46) Antonio estaba estos días *muy triste y cabizbajo* y ahora ...
(*Antología*, I, 421)
- (47) Carmen, Hernando y Ger estaban *allí* desde primera hora de la tarde, cambiando los muebles de sitio y probando el giradiscos.
(*Id.*, 408)
- (48) Estuvo *así* un largo rato, mirando el cadáver ..., que allí, quieto y despatarrado ... (*Id.*, 432)
- (49) Estaba *durmiendo* cuando escuchó un ruido y se puso a pie nerviosa. (*Id.*, 178)
- (50) Su gallardía no era la del chulo; era la de quien está *temiendo* una bofetada y la espera a pie firme. (*Id.*, 464)

上文についていくつかの観察を行なってみよう。

まず(46)の *muy triste y cabizbajo* を外した単文は, 母国語話者の直感によると, 意味的に未完成の文と解釈されるようである。それを完成させるための手段は, というと, まず最初に“場所の”状況項が選ばれてくる。つまり *estos días* という“時”の状況項は, この場合, 意味の完成には義務的要素ではない, と考えなければならない。

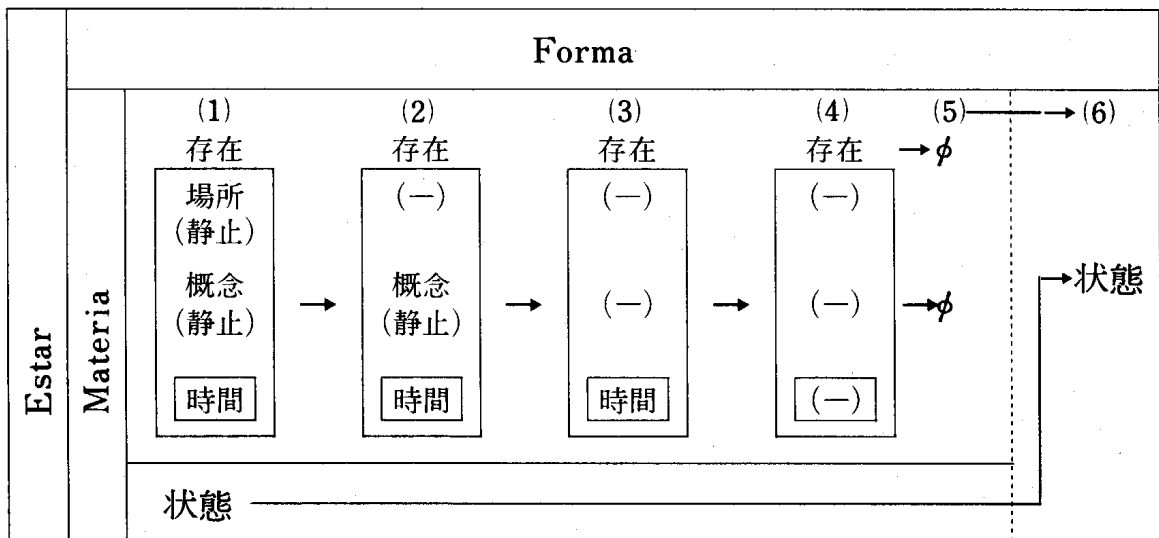
同様に, (47)と(48)の *allí, así* を外すと, (46)と同じく, 意味的には不完全な

文になってしまう。

したがって、もし“助動詞化”がまず、個々の動詞の“完全な意味”の“弱化・消失”から始まるとすれば、この意味の変化は、少なくとも *estar* では状況項として位置付けられる“場所”の意味構成単位の削除から始まることになる。その次の段階に至って、(48)の *así* によって表わされるような構成単位が削除される、と考えたい。

しかし、ここでいう意味構成単位の削除は無条件に起るものではない。これには特別な環境が必要になるだろう。つまり、外部から少なくとも何らかの意味的要素の付加、補填が保証されなければならない。これは特別な形式、即ち構造の存在を暗示する。加えて、未だ動詞 *estar* の助動詞化が完全でない段階では、ここで補填のために付加される要素も、その意味構成上重要な要素として“場所”の単位を持つことが必要となるだろう。この具体的な表われが(49)であると思われる。しかし(50)ではすでにこの条件は満足させられてはいない。つまり(49)の *dormir* には、*dormir aquí {en la cama · en el suelo ...}* が示すように“場所”の意味単位が義務的要素として組み込まれているが、(50)の *temer* にはもはやその必要性は感じられない。この段階では、ヘルンディオの形で *estar* と組む動詞についての意味上の制限は、“移動”を積極的にその意味の構成単位としないもの、というゆるやかな条件に変化してしまっていると考えられる³⁸。

最後に動詞 *estar* の助動詞化の過程を次のように図示してみよう。



上表に関して以下のような補足をおきたい。

- a. Forma, Materiaは夫々に形式 (=形態) と実質 (=意味) とを表わす。
- b. (1)は、「estar は‘存在’を意味の中枢とする。これは、場所 (静止) 的存在または概念 (静止) 的存在のいずれかの可能性を持つ」と読む。なお、‘場所的’なものとして認識しえないもの (例, (48) の así) はすべて‘概念的’とした。
- c. (一) は‘消失’を意味する。
- d. 各語彙動詞の意味内容が、“動作的”なものと“状态的”なものとの二分されると考え、estar の持つ基本的な意味単位を‘状態’として規定した。
- e. (3) 段階から助動詞化が始まる。

6. 結論

以上 *perífrasis en gerundio* を中心にして助動詞成立の可能性を検討したが、“助動詞”という場合、ヘルンディオ以外に不定詞と過去分詞をも含めた迂言形式全体が分析の対象となるべきである。この意味では本稿で扱ったものは、全体の一部でしかないが、ここで論じたことは広く、動詞の非人称形のなす迂言形式すべてに関連している。

こうした前提のもとに、助動詞成立の可能性についての私見を次のようにまとめておきたい。

- a. 助動詞決定の手順とは違って、もし助動詞の形成、成立という問題を考える場合、やはり関係する動詞の語彙的意味、即ち、各動詞に範列的な位置を確保することを可能にする、夫々に固有の意味 (*sentido propio*) から出発するのがいい。
- b. 前述のように、助動詞がすでに体系的なものとして存在する場合もある (*haber marchado* の *haber*; *suele nevar* の *suele* など)。しかし、こうした絶対的な存在は僅少であり、他のものは、語彙動詞としての形式と意味とに、その特徴的機能の理由を求めなくてはならない。
- c. 動詞の自動性、他動性という意味的特徴と助動詞の成立とを関連付けんとする説もあるが、ここでは各動詞の結合価に注目し、各動詞の本来の意味とは、個々の動詞が“必要にして十分な行為項をとる場合に形成さ

れる意味”(例えば, dar は3項動詞で Juan(1) dio la muñeca(2) a su hija (3)), としたい。

d. この語彙動詞が《V(fto)+X+V(ndo)》という特殊な構造の V(fto) の位置に入った場合, 本来的なものとして保有していた意味の中核 (5.5. の図の *Materia*) を弱化させることが可能となる。これは, 言い換えれば, 第2行為項 (他動詞の場合) か状況項 (自動詞の場合) の弱化, 消失の可能性を意味する。

したがって, 動詞定形に語彙的意味が残存する限りは, 意味と抵触するような語彙的意味を持つヘルンディオは用いられない (この段階では, *Está llegando* という組み合わせも不可能であろう)。

e. 上記 d に述べたことから, 動詞定形が, 統語的にも文脈的にも, それ自身が補語を支配する能力を失い, (8)–(12)の条件を満足させる方向に進み, 最終的には, 受動変形をも認める段階に至る。この段階は5.5.に挙げた図の(3)から始まり, (5)に至り助動詞化が完成したと考える。

[追記. 本稿は1987年10月31日の関西イスパニア語学研究会での月例発表の内容を加筆, 修正したものである。その発表の間では学友からいろいろ有益なご意見やご指摘をいただいた。こうした方々の個々のお名前は挙げないが, ここにそれを記して感謝の意を新たにしておきたい。]

[1988年1月]

註 記

- 1) *Esbozo*, págs. 448–449 (§3.12.5., Verbo auxiliar+gerundio—a) y b)
- 2) Rodolfo Lenz, *Oración*, págs. 397–398 (§256)
- 3) Wolf Dietrich, *El aspecto*, págs. 14 y 15 (§0.1.3)
- 4) S. Gili Gaya, *Curso*, págs. 113–115 (§§97 y 98)
- 5) 以下では, 《動詞定形+ヘルンディオ》の組み合わせを, 便宜上, 《V(fto)+V(ndo)》と表わすことにする。
- 6) S. Gili Gaya, *Curso*, pág. 105
- 7) *Id.*, pág. 114
- 8) Juan M. Lope Blanch, *Notas sobre la oración gramatical*, *NRFH*, XVI (1970), pág. 420.
- 9) 本稿の資料体には Francisco García Pavón, *Antología de cuentistas españoles contemporáneos I* (tercera edición), Gredos, Madrid, (1982) を用いている。なお, 数字は当該頁を示す。なお, この形式《V(fto)+V(ndo)》が迂言形式なのか他の構造

なのかについては, Emilio Lorenzo, *El español de hoy, lengua en ebullición*, Madrid, Gredos, (1980), págs. 146 y sigts. の記述や, Michel Launay, 《Acerca de los auxiliares》, LEA, (1980), II-1, págs 42 y sigts. の記述が興味を引く。なお, この文 (5) の iba oyendo ... の iba に実際上の“運動”の意味を与える解釈とそうした解釈をしない母国語話者とがあった。

- 10) *Estudios lingüísticos, temas españoles*, pág. 235.
- 11) *Id.*, pág. 237.
- 12) *Id.*, pág. 263.
- 13) 《Los auxiliares españoles》, *Anales*, X (1970), págs. 61-73 の pág. 68 に, 動詞迂言形式を意味・統語論の立場から規定する五つの特徴が与えられている。この論文は, それ以後の“助動詞”決定の試みに大きな影響をもたらしてきている。例えば, Francisco Marcos Marín, *Curso de gramática española*, Cincel-Kapelusz, Madrid, (1980), págs. 273 y sigts.; David M. Feldman, *Apuntes históricos*, págs. 65 y sigts. の場合など。また動詞迂言形式と助動詞の規定というテーマについては, Elizabeth Luna Traill, *Sintaxis de verboides*, págs. 141 y sigts. が詳しく論じている。
- 14) この文は, (7)を答として引き出すための疑問文と考える。(14)も同じ。
- 15) 文(16)の Lo llora gritando は, lo を gritando の直接補語とする構造では文法的に非適格文である。しかしこの lo を, 例えば, llora a su abuelo (= la pérdida de su abuelo) の直接補語を受けたものと読む場合には, lo llora gritando は適格文になる。(17), (18)についても同じ見方が出来る。
- 16) 文(20)~(25)について, 夫々以下のような文転換(a)~(f)を施し, 10名の母国語話者の反応を調べてみた。

まず(b)の clitic climbing の場合に4名がこの構造をよしとはしなかった。この構造は, (26)~(32)にみられるように, 比較的安定したものと思えるだけに, 意外な反応である。

次に大きな抵抗があったのは(e)の受動転換の場合で, 《estar+siendo+participio pasado》以外の構造はすべて認められない, とする意見もあった。全体的傾向としては, estar に代えて, ir, venir, seguir (人によれば llevar も)は使用可能であるが, andar と quedar は認められない, とする意見が支配的である。また(f)の再帰受動構文も, 意外なことに, 許容度が低い。特に, (e)と(f)の二つの構造について, “Las dos últimas no son usuales” という意見の人たちも, 少数派ながらあった。この二つの構造への転換の可否についての反応は, 多くの問題を含んでいると思われるので, ここでは, これ以上の論評を控えておく。

例えば文(20)をもとに, 次のような転換の場合を考えてみた。

- (20) El mismo va construyendo la casa.
 - (a) ¿Qué va haciendo él mismo?
 - (b) El mismo la va construyendo.
 - (c) ¿Qué va construyendo él mismo?
 - (d) Lo que va construyendo él mismo es la casa.

- (e) La casa va siendo construida por él mismo.
 (f) La casa se va construyendo.
- 17) Eugenio Coseriu, *Estudios de lingüística románica*, pág. 73.
 18) *Lingüística moderna*, pág. 78.
 19) *Teoría y práctica*, pag. 34.
 20) こうした考え方は2.2.に紹介した Lope Blanch の2述部か否か、という基準と本質的には何ら変らない。
 21) Judith Aissen & David M. Perlmutter, 《Clause Reduction in Spanish》*Proceedings*, pág. 4; なお、註9をも参照のこと。
 22) Rafael Cano Aguilar, *Estructuras sintácticas*, págs. 20-32. なお、制辞 (reción) は、‘ある動詞が補語を伴い、その補語の導入方法が限定されている場合、動詞のもつこの特性を〈制辞〉という (『ラールス言語学用語辞典』大修館書店)’との定義に従い、動詞の補語導入の能力そのものにも及ぶ、と理解しておく。結合価 (valencia) とは、‘個々の動詞に付与される主語をも含めての行為項 (actante) の数’、と規定される。したがって、非人称動詞は結合価0、自動詞は結合価1、他動詞は結合価2と規定出来る。
 23) 自動詞性、他動詞性は絶対的な概念とはなり得ないので、これを結合価の面から見直そうとする考えもある。R. C. Aguilar, *Estructuras sintácticas*, págs. 26-28.
 24) Michel Launay はこの主語に対する選択制限の違いに拠って、Fontanella de Weinberg の提起した Pedro suele patear a Juan と Pedro quiere patear a Juan の2文が示す、受動変形に対するふるまいの違いを説明している (《Acerca de los auxiliares》, págs. 60-61). なお、本文では、文(39)の Está haciendo ... の está を anda には代替しえないと考えたが、この代替は可能で、そこに生じる共示が異なるだけ、とする意見もあったことを付記したい。
 25) Gustave Guillaume, *Language et science du langage*, págs. 73-86. この《subductivité, subduction》については定まった訳語はないとの教えを受けた。基本的な意味は「下方に導くこと」で、辞書的には「除去、引き下げ」(『新英和大辞典』研究社)、となっている。なお、この Guillaume の説を発展させ、イスパニア語の助動詞の規定に応用したのが、Mauricio Molho, *Sistemática del verbo español*, Madrid, Gredos (1975) である。
 26) Wolf Dietrich, *El aspecto*, págs. 67 y sigts.
 27) Mauricio Molho, *Sistemática*, págs. 150-180 の記述を参考にした。
 28) Gustave Guillaume, *Language*, pág. 78.
 29) Gustave Guillaume, *Id.*, pág. 78.
 30) 註25参照。
 31) Wolf Dietrich, *El aspecto*, pág. 63.
 32) Dietrich (*Id.*, pág. 68) も指摘しているように、Guillaumeは subduction の程度が特定の構造と密接に関係することを意識して、《etre como auxiliar del passé composé》の方が《etre como cópula》よりも subduction の度合が大であるといっている (Gustave Guillaume, *Language*, pág. 78).

- 33) Amado Alonso も積極的にではないが、《変形的意味》——助動詞化へのきっかけ——成立のための構造の役割について何度も言及している (*Estudios*, pág. 238).
- 34) Michel Launay, 《Acerca de los auxiliares》, pág. 77.
- 35) この用例は筆者がメキシコの主要紙の一つ, *Excelsior* から拾い出したものだが、不注意でその日付けをメモしていない。
- 36) 現代イスパニア語で問題となる構造《estar+siendo+V(do)》については, Manuel A. Ramos. 《El fenómeno de “estar siendo,” *Hispania*, LX (1972), Cincinnati, 1972, págs. 128-131; S. Gili Gaya, *Nuestra lengua materna*, Instituto de Cultura Puertorriqueña, San Juan de Puerto Rico, 1973, págs. 65-75 に詳しい。
- 37) ここでは V(ndo) のみを挙げたが、この V(ndo), 即ちヘルンディオに代えて不定詞と過去分詞も同じ枠組に入ることはいうまでもない。すると、複合時制や受動形の形成にかかわってくる haber や ser はどう扱えばいいか、例えば、この二者を形態素動詞とし、他の《V(fo)+formas no personales del verbo》の V(fo) はすべて verbos copulativos とする分類も可能であると思われる。
- 38) 資料体の *Antología I* (473ページ) から抽出した《estar+gerundio》90余例、《ir+gerundio》74余例をみると、estar と組むヘルンディオにはここで述べた語彙的意味のものが圧倒的に多く、*Estábamos llegando a casa* (*Antología I*, 321) のような場合は僅少であることに気付く。これに対し、ir と組む動詞には、具体的、比喩的のいずれにせよ‘移動・変化’を意味するものが支配的である。*Conforme el día iba avanzando, las piernas se le hinchaban* (*Id.*, 177); *Con tal motivo fue subiendo los precios* (*Id.*, 236).

主たる参考文献

- Aissen, Judith, & Perlmutter, David M., 《Clause Reduction in Spanish》, *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*, Univ. of Calif., Calif., 1976.
- Alonso, Amado, *Estudios Lingüísticos, temas españoles*, Gredos, Madrid, 1970.
- Cano Aguilar, Rafael, *Estructuras sintácticas transitivas en el español actual*, Gredos, Madrid, 1981.
- Coseriu, Eugenio, *Estudios de lingüística románica*, Gredos, Madrid, 1977.
- Dietrich, Wolf, *El aspecto verbal perifrástico en las lenguas románicas*, Gredos, Madrid, 1983.
- Feldman, David M., *Apuntes históricos sobre las frases verbales de modo en español*, Plaza Mayor, Madrid, 1974.
- Fontanella de Weinberg, M. B. 《Los auxiliares españoles》, en *Anales del Instituto de Lingüística de Mendoza*, t, 10 (1970), págs. 61-73.
- Gili Gaya, Samuel, *Curso superior de sintaxis española*, Biblograf, Barcelona, 1985.
- Gómez Torrego, Leonardo, *Teoría y práctica de la sintaxis*, Alhambra, Madrid, 1986.
- Guillaume, Gustave, 《Theorie des auxiliares et examen de faits connexes》, en *Language et science du langage*, A.-G. Nizet, Paris, 1973.
- Launay, Michel, 《Acerca de los auxiliares y frases verbales》, en *Lingüística*

Española Actual, II/1-(1980), págs. 39-79.

Luna Traill, Elizabeth, *Sintaxis de los verboides en el habla culta de la Ciudad de México*, UNAM, México, 1980.

Lenz, Rodolfo, *La oración y sus partes*, Nacimiento, Santiago de Chile, 1944.

Molho, Mauricio, *Sistemática del verbo español*, Gredos, Madrid, 1975.

Pottier, Bernard, *Lingüística moderna y filología hispánica* Gredos, Madrid, 1968,

Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*,

Espasa-Calpe, Madrid, 1973.

Tesnière, Lucien, *Eléments de syntaxe structurale*, Klincksieck, Paris, 1969.